特集1

生き続ける建築 —4

田辺淳吉

Junkichi Tanabe

田辺淳吉は47歳で生涯を閉じた。
短命であり、なおかつ建築家としての大半を清水組(現・清水建設)の技師・技師長として
過ごしたため、その名はあまり知られていない。しかし、同時代の建築家の間では、
芸術家肌の建築家として高く評価され、事実、珠玉の作品を残している。
存続の危機を移築保存で回避した「誠之堂」、空襲を免れた「晩香廬」と「青淵文庫」、
国の重要伝統的建造物群保存地区の一角でランドマークとして親しまれている「高岡共立銀行」は、
今まで生き抜いてきた建物が持つ強運に加え、田辺作品の魅力、
そして、人々がそれを大切に想う心に支えられ、今後も更に長く生き続けるに違いない。

日本のアーツ・アンド・クラフツ建築を目指して

松波秀子
HIDEKO MATSUNAMI

まつなみ・ひでこ——清水建設技術研究所 上席研究員／1972年、名古屋大学工学部建築学科卒業。1974年、同大学大学院修士課程修了。博物館明治村学芸員を経て、1990年から清水建設技術研究所勤務。近代建築史専攻。歴史的建造物の調査・保存修復に従事。
主な著書：『東海の近代建築』（共著、中日新聞本社 1981）、『建築史の想像力』（共著、学芸出版社 1996）『近代化遺産の見方・調べ方』（共著、ぎょうせい 1998）、『日本近代化遺産を歩く—産業・土木・建築・機械、近代を語る証人たち』（共著、JTB 2001）など。

田辺淳吉は、明治12年（1879）、東京本郷西片町に生まれた。西片は福山藩阿部家の江戸屋敷があった所。父・新七郎は元福山藩士で宮内省の役人、書画を能くし、兄・協一は日本画家であった。明治33年（1900）、東京帝国大学建築学科入学。同期に佐野利器[＊1]、佐藤功一[＊2]、大熊喜邦[＊3]、北村耕造、松井清足らがいた。彼らは特に仲が良く、同窓会「丼会」をつくり、家族ぐるみの交流は終生続いた。学生時代から芸術的才能は抜きん出ており、佐野は「意匠が上手で天才的だった」[＊4]、佐藤は「（同級の内）大學へ來る迄最も美術的素養を多く受けて来た」、「所謂芸術家的本分といふ様なものがどこからともなく湧いて居る人」[＊5] と述べている。

明治36年（1903）7月卒業、10月に清水満之助店[＊6] に入店。9月には同期の北村も入店している。当時清水店技師長の岡本鋈太郎が東京帝大卒業生の採用を希望、清水釘吉や岡本と昵懇の大沢三之助が田辺と北村を説得したといわれる[＊7]。翌37年2月、「第一銀行京都支店」（1903）新築工事現場にて設計者・辰野金吾を補佐するため京都へ赴任、翌年11月に完成させ、12月下旬に帰京し本店勤務に復帰した[＊8]。関西赴任中に設計した「大阪瓦斯」（1909）はセセッション式[＊9]、入社して最初の意欲作である。清水組技師時代の作品には、「東海銀行」、「第一銀行下關支店」、「澁澤倉庫」（1909）、「日清紡績娯樂場」（1911）、「第一銀行釜山支店」（1912）、「第一銀行深川支店」、「紅葉屋銀行」（1913）などがある。

澁澤倉庫は、わが国最初の鉄筋コンクリート造建築とされる神戸和田岬の旧東京倉庫[＊10] と同年の着工で、清水組としても鉄筋コンクリート造の初めての取り組みであった。当時は、意匠設計だけでなく最新技術の導入と実施も、技師・田辺のミッションだったのである。

ところで、同じ福山藩士の家に生まれ、本郷西片に住み、セセッションに影響を受け、工芸に強い関心を持つなど、極めて近い存在でありながら意外にその接点が知られていない田辺と武田五一[＊11] だが、武田の初期の代表作でセセッション式の嚆矢とされる「福島行信邸」（1907）の実施設計と、増築（1914）設計を行っていることは注目に値する。

明治42年（1909）8月、渋沢栄一を団長とする渡米実業団に随行し、全米54ヵ所を訪問の後、単独で米国を視察。更に欧州に渡り各国を巡回し、翌43年10月帰国した。オーストリアやドイツで流行していたセセッション建築に強い感銘を受けた。

大正2年（1913）、清水組技師長となり、同社幹部としてますます多忙となる。作品の多くは銀行建築や事務所建築で、後進の育成と指導に当たっていたが、大正5年（1916）、建築家・田辺の本領を存分に発揮できる格好の題材として、「誠之堂」（1916）と「晩香廬」（1917）の設計に打ち込み、珠玉の作品をつくり上げた。田辺自身「僕自らの好みで僕が恣に手を下し」[＊12] と述べている。この他、清水組後期の作品に、「原宿池田侯爵邸」（1918）、「四日市川喜多別邸洋館広間改装」、「第一銀行京都支店増築」（1919）、「日本倶樂部」（1921）、「東京會館」（1922）などがある。

大正9年（1920）に退社。翌10年、恩師・中村達太郎と「中村田邊建築事務所」を設立、丸ビルに事務所を構えた。「青淵文庫」（1925）の他、「大垣共立銀行」、「第一銀行小樽支店」、「増田邸」、「丸善バラック」、「松屋呉服店」（1923）、「京都後川文蔵氏邸洋館」、「石井健吾別邸」（1925）などを手掛ける。青淵文庫の完成予定間近の大正12年（1923）9月、関東大震災により日本倶樂部、東京會館など、清水組で手掛けた多くの建築が被災、その復旧のため多忙を極める。過労のため、大正15年（1926）、47歳という短い生涯を閉じた。熟練した建築家としてのスタートを切った矢先のことであった。

清水組製図場にて　技術部（設計部）のスタッフ。前から2列目中央に並ぶ岡本と田辺の技師長交代の大正2年頃の撮影と思われる

■■■

高岡共立銀行（現・富山銀行本店）

近代建築のサイトやガイドブックには、「高岡共立銀行」（1914）を辰野金吾の設計、あるいは監修と解説しているものが散見される。確かに、赤い化粧レンガ壁に白い御影石の横縞が際立つ典型的な辰野式フリー・クラシックの外観であるが、辰野の関与はない[＊12]。明治40年から大正4年までの高岡共立銀行を含む52件の銀行建築が収録されている『清水組技術部設計建築作品集 銀行之巻』[＊13] には、ルネッサンス系の意匠が大半を占める中、どうして高岡共立銀行だけが辰野式なのだろうか？

明治28年（1895）に設立された高岡共立銀行の初代頭取は、海運王として知られる馬場道久。馬場らは銀行業務に明るい、元第一銀行高岡出張所の主任・大橋半七郎を支配人に迎え、開業初期を乗り切ったという[＊14]。大正2年（1913）、増資を行い業務を拡充するとともに本店新築を決めたが、清水組に依頼したのは第一銀行、すなわち渋沢栄一の関係だと推される。その意匠については、創立時から第一銀行と縁の深かった当時の幹部の意向が強く働いたのではないかと思われるが、想像の域を出ない。第一銀行京都支店の現場で辰野の補佐をした田辺により、抑制された辰野式で手堅くまとめられている。大正2年（1913）9月起工、翌3年12月完成、翌々4年1月に落成式が行われた。

現在は富山銀行本店となり[＊15]、現役の銀行建築として建ち続けている。建物は、土蔵造りの町家が建ち並ぶ重要伝統的建造物群保存地区にあり、北陸随一の本格的洋風建築として異彩を放ち、市民から「赤レンガの銀行」として親しまれている。

■■■

誠之堂

埼玉県深谷市に建つ誠之堂は、東京世田谷区から移築されたものである。世田谷区瀬田にはかつて第一銀行[＊16] の保養施設「清和園」があり、大正5年（1916）、創立者・渋沢栄一の喜寿を記念して小さな記念館が建てられた。渋沢により、四書『中庸』の「誠之者、人之道也」からとって付けられた“誠之堂”の名が、田辺が通った本郷西片の誠之小学校[＊17] に重なるのは偶然であろうか。大正の名建築として名高く、その保存が望まれていたが、やむなく解体されることになり、仮設シートに覆われた直後、危機一髪のところで、渋沢の出身地である深谷市への移築が決まったのである。

自作についてほとんど語ることのなかった田辺だが、「誠之堂」については『建築工藝叢誌』[＊18] に一文を寄せ、設計条件は、“西洋風、田舎風、30坪前後、小集会としての設備の4点のみ”で、位置と外観は一任された。設計上の苦心と称するものはなく、質素を旨として心ゆくまでに意匠を立て、気の付いた処にある程度の試みをしたと述べている。「大体の風趣は英国の田園趣味に基づき、これに朝鮮支那あたりの手法を巧みに取り入れている」[＊5]。佐藤功一を始め、松井貴太郎、中村鎮、前田松韻らも高く評価している。

外壁のレンガ積みは、“質素”、“特に凝らない”を貫いたというが、佐藤が「煉瓦の配列には就中意匠上の考察が現れている」[＊5] というように、色調の異なるレンガを巧みに配列して、豊かな表情のあるフランス積みの壁面を構成している。レンガを一枚一枚解体して搬送し、移築先で積み直す方法では、この味わいのあるレンガ壁を復原することは不可能である。そこで、レンガ壁をそっくりそのまま移築する“大ばらし”の手法が採用された。レンガ壁を大きなユニットに切断して搬送し、移築先に新設した基礎と臥梁でPC鋼棒を挿入して補強されている。なお、誠之堂のレンガは、深谷の日本煉瓦工場のホフマン窯で焼かれたものであることが「上敷免」[＊19] の刻印から判明し、80余年ぶりのレン

[＊1] 佐野利器（1880〜1956）
後に東京帝国大学教授となり建築構造学の基礎を築く
[＊2] 佐藤功一（1878〜1941）
早稲田大学建築学科の基礎を築く
[＊3] 大熊喜邦（1877〜1952）
大蔵省営繕官僚となり、国会議事堂を完成させる
[＊4]『佐野利器—佐野博士追想録』（佐野博士追想録編集委員会編　1957）
[＊5]『田邊淳吉氏作品集』（佐藤功一編、洪洋社 1921）
[＊6] 現在の清水建設。当時は清水店、清水方と称した。1915年に合資会社清水組に改組。以下、清水組と記す
[＊7]『師と友—建築をめぐる人びと』森井健介著（鹿島出版会　1967）
[＊8]『消息欄』（『建築雑誌』1904年2・5月、1906年1月）。なお、田辺設計とされる「日本女子大学校講堂兼図書館（現・日本女子大学成瀬記念講堂）」は明治38年（1905）4月起工、同年11月竣工で、起工の1年前から竣工直前までの期間、すなわち設計期間と工事期間が、田辺の京都赴任時期と重なる。また、北村耕造の追悼記事（『建築雑誌』1939年9月）の実績作品に「日本女子大学校講堂兼図書館」が記されていることから、北村が主担当であったと推察される
[＊9] 田辺淳吉「誠之堂と晩香舎の建築」（『美術旬報』第158号、1932年5月）
[＊10] 三菱倉庫の前身
[＊11] 前号の「生き続ける建築—3 武田五一」を参照（『INAX REPORT』No.170、2007年1月、p.4〜）

[＊12]「巻末附圖説明」（『建築雑誌』1925年6月）清水建設所蔵の工事経歴書に明記。『創業百年史』（北陸銀行編　0978）に「辰野金吾設計」とあるのは誤記
[＊13] 大正4年（1915）刊行。当時、技師長をトップとする設計部門は、設計部を技術部と称したが、社員（店員）は「製図場」と呼んでいたようである
[＊14]『創業百年史』（北陸銀行編　1978）
[＊15] 大正9年（1934）、高岡共立銀行は（旧）高岡銀行と合併して（新）高岡銀行となり、（新）高岡銀行本店となった。昭和18年（1943）、高岡銀行を含む県内の四銀行が合併して富山市に本店を置く北陸銀行が設立され、北陸銀行高岡支店となったが、昭和39年（1964）、富山産業銀行（昭和29年設立）がこの建物を取得し同行本店となり、昭和42年（1967）、同銀行は富山銀行に改称され同銀行本店となり、現在に至る
[＊16] 現・みずほ銀行
[＊17] 誠之小学校の名は田辺家出身の福山藩藩校「誠之館」にちなむ
[＊18]『建築工藝叢誌』第2期第24號、1916年9月
[＊19] 深谷の上敷免（地名）に日本煉瓦の工場があり、レンガには「上敷免」の刻印が付きた

ガの里帰りとなった。

公民館に併設する集会施設として一般の利用に供しているが、建築に関心のある者や建築を志す者など、県外からの利用、見学者も多いと聞く。

■■■

晩香廬

渋沢栄一の喜寿を祝い清水満之助が贈った建物で、北区飛鳥山の旧渋沢邸「曖依村荘」跡地に現存する。“晩香廬”は渋沢が自作の漢詩「菊花晩節香」からとって命名したといわれ［＊20］、バンガロー（Bungalow）の字音に当てはめたともいわれる［＊21］。大正5年（1916）10月に贈った献呈目録には「バンガロー式小亭」と記され［＊5］、後述の備品の内容と点数、おのおのの工芸作家の名が列記されている。

大熊喜邦は「數寄屋の洋館、茶がかったヴィラなどは、他人の到底企及し難い特技を示されている」［＊5］、佐藤功一は「作者の深い研究と默想とから迸り出たもので、（中略）飽迄気の効いたそして自由な意匠と手法とを示してゐる。和洋の様式を渾然一和した恣なる手腕は羨望に堪えない」［＊5］、中村鎮も、「總ての部分が周到なる用意を以て意匠せられて居る」［＊22］、と賞賛している。三者とも、洋風建築に日本の茶室などに見られる洗練された情趣を見事に融合させた田辺の手腕を評価するとともに、日本の伝統的な意匠や機能を単純に取り入れるのではなく、材料や細部意匠の隅々まで周到に配慮する田辺の設計の姿勢“心尽くし”に言及している。晩香廬は、洋風建築の知識もあり、伝統的な日本建築にも精通していた田辺が、洋と和にとらわれない自由な表現を求めた結果の珠玉の作品ということができる。

晩香廬で特筆すべきは“建築と工芸の提携”という新しい試みがなされたことである［＊23］。建物に併せて、茶器、花器、卓子敷などの備品も贈ることになり、藤井達吉、津田青楓、高村豊周、富本憲吉、河合卯之助、清水六兵衛ら、当時新進気鋭の美術工芸作家に、あらかじめ建物の目的、意匠の梗概を説明して製作を依頼したのである［＊24］。

誠之堂における田園趣味の英国農家風、晩香廬における建築と工芸の提携、質素で技巧に凝らない一方で、意匠、材料・仕上を徹底的に吟味、工夫する設計態度。田辺の目指したものは、日本におけるアーツ・アンド・クラフツ建築であった。

■■■

青淵文庫

渋沢栄一の傘寿（八十寿）と男爵から子爵への陞爵（しょうしゃく）を祝い、当時の竜門社［＊25］の会員が贈った建物で、晩香廬に隣接して建つ。昭和20年（1945）4月、空襲で渋沢邸の大半の施設が焼失したが、青淵文庫と晩香廬は戦禍を免れたのである。

文字通り、渋沢の雅号「青淵」にちなむ文庫で、彼が収集した徳川慶喜の伝記史料と論語関係の書籍を収める予定であったが、兜町の渋沢事務所にあった史料や漢籍は震災で焼失してしまい、文庫でなく内外からの訪問客の迎賓館として使用された。

大正11年（1922）春に着工し、完成間近の翌12年9月、関東大震災に遭い工事は中断、14年5月にようやく完成した。文庫として堅牢性と耐火性が求められ、構造はレンガ1枚半積みの内側に鉄筋コンクリートの壁を増し打ちしている。外壁は月出石張り（つきでいし）［＊26］、外部建具は鋼製網入りガラス窓と鋼製開き窓の二重、2階書庫入口には鋼製防火戸を設けている。様式主義的な意匠は影をひそめ、装飾を抑制した端正なつくりだが、正面中央の4連の開口部上部のステンドグラスと、開口部額縁の装飾タイルが華やかさを与えている。

中村田邊建築事務所を設立してからの仕事である。大正9年（1920）に東京帝大を退官した中村達太郎と事務所を設立した経緯は詳らかではないが、中村は「手一度圖面に觸るれば、奇想忽ち溢流し、良案立どころに成る」［＊5］と高く評価していた。

■■■

終わりに

田辺の建築家としての活動は、大学卒業の24歳から47歳で亡くなるまでの約23年間、43歳で独立した後は震災復旧に忙殺された4年間しかない。同世代の建築家の主要作品の多くは震災後のものだが、田辺にはそれがない。現存作品が限られている中、彼の好みと才能が遺憾なく発揮された代表作の誠之堂と晩香廬、そして青淵文庫が、大正期を代表する建築家・田辺の作風をよく示す作品として評価され、国の重要文化財に指定されている。今も大切に保存されていることは、誠に幸運なことであるといえよう。✽（図版解説も筆者）

［＊20］渋沢の長女・穂積歌子の晩香廬談話室に掲げられた大額の撰文（大正7年菊月）による。なお、渋沢の父親の号「晩香」、戒名「晩香院藍田青於居士」、渋沢の個人用箋の「晩香書屋」など、「晩香」は詩作以前に渋沢家で聞かれる語であった

［＊21］これより8年前、田辺はオーストラリア、パースの建築家が『英國建築雑誌』に書いた「西豪州の住家」の抄訳を『建築雑誌』（1908年1月）に寄稿した。そこで、同地の「バンガロー」に着目し、日本の家との共通点を指摘している

［＊22］中村鎮「晩香廬の記」『美術寫眞畫報』（1920年3月）

［＊23］藤井達吉「澁澤男爵家新室の批判」『現代之圖案工藝』（1918年5月）

［＊24］田邊淳吉「誠之堂と晩香舎の建築」『美術新報』（1918年5月）

［＊25］現在の渋沢栄一記念財団の前身。竜門社は渋沢の薫陶を受けた人々の集まりとして発足、次第に多くの人々の思慕と共鳴を得て拡大し、明治42年（1909）に社則をつくって新たな組織とし、大正13年（1924）に財団法人となった

［＊26］伊豆船原で産出した安山岩の一種

青淵文庫の装飾タイル　露台（テラス）に面した正面の柱型の装飾タイルは、京都の泰平窯で焼かれた泰平タペストリータイル。渋沢家の家紋「違い柏」にちなんだ柏の葉と実が描かれ、対角に走る金帯が印象的なデザインで、4枚1組で図柄を表現している。この他、ボーダーやコーナーの図柄も、形を変えた柏と金帯で構成される。愛陶家・田辺の装飾タイルに対するこだわりがうかがえる

青淵文庫

［建築概要］
所在地：東京都北区西ヶ原2-16-1
飛鳥山公園内
規模：地上2階
構造：レンガおよびRC造
竣工年：1925年
修復年：1964年、2003年
※重要文化財（2005年指定）

上――閲覧室東面　開口部まわりには外壁と同様の柏の図柄の装飾タイルを張る。欄間のステンドグラスは、竜門社にちなみ、左右に登り龍と降り龍を配する。中央2面のステンドグラスには、「壽」の文字を描く。照明器具は当初のものである。2003年の修復で、失われていたカーテンと絨毯を、古写真などを参考に復原された
下――東面外観　高さの異なる直方体を前後に並べた端正な建物。東面前面に露台を張り出し、4連の大きな開口を設けている。その周囲は華やかな装飾タイルで縁取られ、5本の列柱が建ち並ぶような印象を与え、正面性を強調している

談話室東面　柱は栗材で野趣を出している。佐藤功一によれば「コムポジションは単純だが、十二分に作者の技倆を揮ったのであらう。見て行くほどに琢磨されたデテールを發見する。腰羽目は萩莖の立簾、壁は青貝交り、暖炉傍側の小窓には淡貝を利用し（後略）」［＊5］。中村鎮によれば「壁は柱を處々に表はして柱間を眞壁にし、壁の下方には萩の莖を用ひて羽目とし、上方には光澤のある貝殻の砕ひた樣なものが塗込れてある。天井は四注屋根を下から見上げた樣に緩く勾配を附けて、其面の合目に木の縁を置き、木の傍側には漆喰の唐草模樣が附してある。英吉利の建築に最も多く見る手法である（後略）」（中村鎮「晩香廬の記」『美術新報』1918年5月）

晩香廬

［建築概要］
所在地：東京都北区西ヶ原
2-16-1 飛鳥山公園内
規模：平家
構造：木造
竣工年：1917年
修復年：1964年、1999年
※重要文化財（2005年指定）

左――談話室北面暖炉まわり　佐藤功一「爐邊りは一樣の煉瓦を色々に組み合わせて中央に『壽』の字の模樣を點出している」。中村鎮「暖爐は黒紫がかった貼付瓦で張られて上の方に同じく貼付瓦で同じく貼付瓦で支那がかつた「壽」の字の模樣が入れてある」［＊5］
右――東面外観　基本的に洋風の外観である。赤い塩焼瓦の屋根に煙突、大きな開口部、深い軒が特徴的

晩香廬・青淵文庫 内部公開
期間：2007年5月6日までの土・日・祝日
時間：12：30～15：45
場所：飛鳥山公園内
問い合わせ：渋沢史料館 Tel.03-3910-0005

高岡共立銀行

［建築概要］
所在地：富山県高岡市守山町22
規模：地上2階
構造：補強式鉄骨レンガ造
竣工年：1914年
改修年：1964年頃
※重要伝統的建造物群保存地区内

正面外観　辰野式フリー・クラシックの意匠である。装飾を控え目にし、1・2階を貫く柱型を強調し、全体をすっきりと端正にまとめている辺りは、田辺の手腕といえよう。化粧レンガ（現在の外装タイルに相当）は、大阪市中央公会堂と同じ大阪窯業製。御影石は岡山県北木島産

2階会議室　内装は度重なる改修で変更されているが、骨格は当初のままである。東側窓の噴水の図柄のステンドグラスも恐らく当初のもの

広間内部　中央の暖炉上の渋沢翁のレリーフは武石弘三郎の作。周囲のタイルは、三河平坂産装飾レンガ。愛知県西尾市平坂には当時、大阪窯業の工場があり、恐らく大阪窯業製。両脇のステンドグラスの図柄は、中国古代の画像石に倣った意匠。ヴォールト天井リブの石膏彫刻は、高麗や李朝の青磁によく見られる雲鶴模様に松葉をあしらい、端部には「寿」の字を描くなど、渋沢翁愛読の論語にちなみ、支那や朝鮮の好みを随所に取り入れている。照明器具と家具は、古写真に基づいて復原製作された

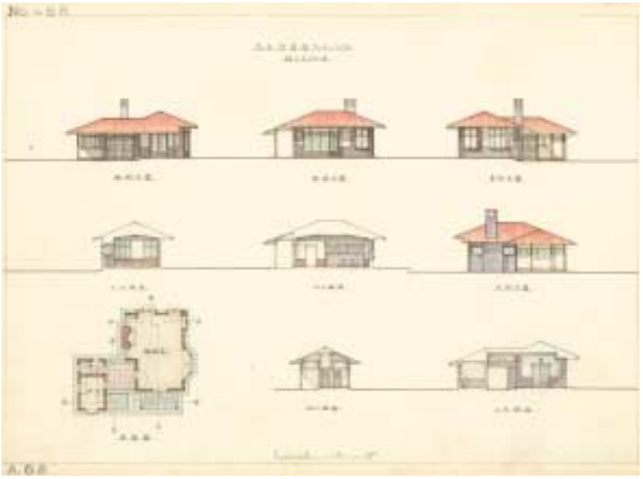
誠之堂

［建築概要］
所在地：埼玉県深谷市大字起会字唐言84-1他
規模：平家
構造：補強レンガ造（現在）
竣工年：1916年
移築年：2000年
※重要文化財（2003年指定）

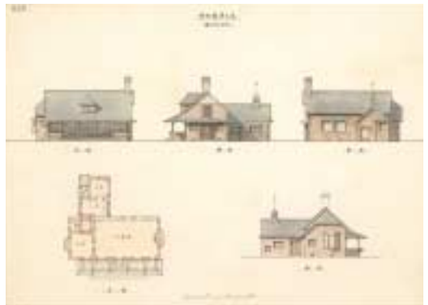
外観　暖炉の外側の壁には、色調の異なる化粧レンガを用いて「喜寿」の文字を描いて張る

次之間から玄関ホールを見る。玄関ホールは外部空間的に扱い、外壁と同じレンガ積みとし、小壁はハーフティンバー風の仕上げである

田辺淳吉 ドローイング


1

2


3

4

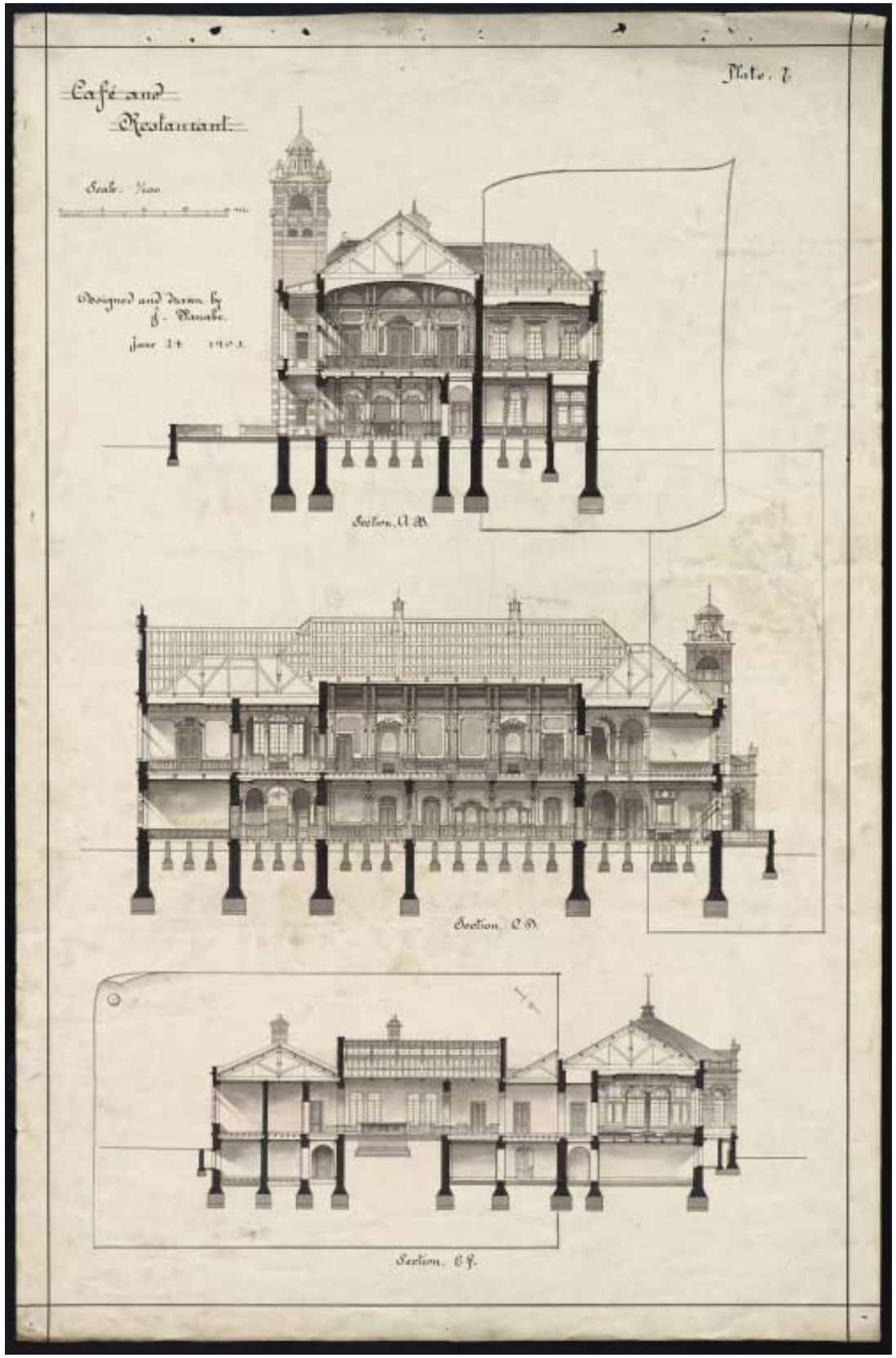
5

6

7

1　彩色図面「王子澁澤邸ガーデンハウス」
2　彩色図面「高岡共立銀行」
3　彩色図面「清和園誠之堂」
4　大正5年11月に描かれた「園亭圖案」。「晩香廬」の第1案とされる。翌年2月の國民美術協會第五回展覧會に出品された。『田邊淳吉氏作品集』には「バンガロー習作」として収録され、佐藤功一は「日本趣味を巧に粧點つた小亭」と評している
5　色絵草花文皿　高台に「KYOTO JT 1918」
6　色絵亀甲文向付　高台に「凡 1922」田辺は「凡米」と号した
7　米国欧州旅行写真帖（田辺撮影）　壁を組み立てる過程で鋼製サッシの枠を組み入れる工法は、青淵文庫のそれと同様である

1～3　清水建設所蔵
4　『田邊淳吉氏作品集』所収
5～7　渋沢史料館所蔵



卒業設計「A Café and Restaurant」（1903）　記念物、公共建築といった重々しいテーマではなく、カフェ・レストランを選んだところに既に田辺らしさがうかがえる

田辺淳吉 人と作品

1879-1926

略歴

1879年（明12）	東京本郷西片町に生まれる
1900年（明33）	東京帝国大学工科大学建築学科入学
1903年（明36）	東京帝国大学工科大学建築学科卒業。同級生8名と井会を設立。清水満之助店入社。第一銀行京都支店新築のため、清水組の用務を似て、京都へ赴任
1905年（明38）	帰京し本店勤務に復帰
1909年（明42）	建築學會臨時通常會講演「東京市區改正の状態と建築常識」を行う。欧米視察のため横浜出航。渋沢栄一を団長とする「渡米実業団随行旅行」に、清水店からは原林之助支配人と田辺が参加。サンフランシスコから帰国する随行団を見送った後、単独で北米と欧州各地を歴訪。1910年に帰国
1911年（明44）	建築學會通常総會講演「『建築請負契約書案』案と通常總会の決議」を行う
1913年（大2）	清水組技師長となる。早稲田大学建築学科非常勤講師
1916年（大5）	建築學會通常総會講演「社會より見たる建築家」を行う
1917年（大6）	日本建築学会常置委員会第二部委員。建築學會通常會講演「風災視察の一端」を行う
1918年（大7）	日本建築学会準耐火構造委員会委員長
1919年（大8）	講演「住宅に對する我々の態度」を帝國ホテルにて行う
1920年（大9）	清水組退社
1921年（大10）	中村達太郎と中村田邊建築事務所設立。文部省主催「生活改善講習会」第二回講演「本邦住宅改善の実地的解決」
1922年（大11）	講演『文化村の住宅に就いて』を行う。日本女子大学非常勤講師
1926年（大15）	逝去

主な作品

1903年（明36）	株式會社第一銀行京都支店（京都）（辰野金吾の補佐）
1905年（明38）	大阪瓦斯株式會社（大阪）、日本女子大學校講堂兼圖書室（東京）
1907年（明40）	福島行信邸・実施設計（東京）
1908年（明41）	エフ・ダブルユ・ホーン商會（東京）
1909年（明42）	株式會社東海銀行（東京）、株式會社第一銀行下關支店（山口）、澁澤倉庫（東京）（岡本鋈太郎と共同設計）、丸善株式会社（東京）（佐野利器に協力）
1911年（明44）	紳士住宅圖案洋風（岡田信一郎と共同設計、製図は富本憲吉）、日清紡績株式會社娯樂場（東京）
1912年（大1）	株式會社第一銀行釜山支店（韓国）
1913年（大2）	自邸（東京）、株式會社第一銀行深川支店（東京）、合名會社紅葉屋銀行（東京）（田中実と共同設計）、東洋生命保險株式會社京城支店（韓国）、帝國生命保險株式會社京城支店（韓国）、澁澤貸事務所（東京）
1914年（大3）	株式會社第百十銀行下關東支店（山口）（大友弘と共同設計）、株式會社高岡共立銀行（富山）、福島行信邸・増築（東京）
1916年（大5）	誠之堂（東京）、自邸・増改築（東京）
1917年（大6）	晩香廬（東京）
1918年（大7）	原宿池田侯爵邸（東京）
1919年（大8）	株式會社第一銀行京都支店・増築（京都）、四日市川喜多別邸洋館・広間改装（三重）
1920年（大9）	池田候爵邸・内部（東京）
1921年（大10）	自邸（洗足別邸）（東京）、日本倶樂部（東京）
1922年（大11）	東京會館（東京）、理化学研究所正門（東京）
1923年（大12）	大垣共立銀行（岐阜）、株式會社第一銀行小樽支店（北海道）、丸善書店假營業所並假本館（バラック）（東京）、増田邸（東京）（大友弘と共同設計）、松屋呉服店（東京）
1925年（大14）	京都後川文蔵氏邸洋館（京都）、石井健吾別邸・白楽荘（神奈川）、青淵文庫（東京）

井会の仲間たち　前列右から堀内智三郎、渡辺浚郎、北村耕造、佐藤功一。後列右から松井清足、田辺淳吉、佐野利器、大熊喜邦。大正中頃の撮影と思われる

取材協力・資料・写真提供
北区役所／渋沢史料館（p.4）／清水建設（p.5、表-4）／東京大学工学部建築学科（p.13）／富山銀行本店／博物館明治村（p.14）／深谷市教育委員会／「晩香廬保存修理工事報告書」（渋沢栄一記念財団　2005）
＊特に明記のない写真は、2007年1～2月に新規撮影したものです。

［次号予告］
次号（7月20日発行）の「生き続ける建築」は本野精吾です。